大迫三郎PGのお話「渋沢栄一」と職業奉仕

「職業を通じて奉仕の理念を追究する」が職業奉仕の理念であり実践をともなう哲学です。更に分かり易く言うと、商売を行うに当たっては、己の利益のみを考えて売り込むのではなく、取引相手の気持ちになって、製品の品質、価格の満足を添えて売りなさい、ということです。事業（経営･商売）を永く継続させるためには、とことん相手が満足することを与えなければなりません。俗に言う**「売り手良し、買い手良し、世間良し」**です。

私がガバナーノミニーを引き受ける頃、丁度タイミング良く渋沢栄一著『論語と算盤』読みました。どのページをめくってもうなずく事ばかりでした。「商売は論語の精神を基本にして、その上で算盤（儲け）を得なさい。」と言うものです。私は論語をしっかり学んだわけではありませんでしたが、「人間性の道理に立って算盤をはじく。」との渋沢栄一の思想哲学には深く感動し、これこそロータリーにおける「職業奉仕」の真髄ではないかと感じました。「論語と算盤」は滅私奉公、いわゆる私欲にとらわれず社会、国の為に尽くすと言う信念が貫かれており、ロータリーの「超我の奉仕」にも通じます。渋沢は大蔵省を辞める時、同僚達から「将来は高官が期待されるのに、なぜ金儲けの為に身を処するのか」と諌められたのに対し「大蔵官位だけに居ては民間の経済の事は分かる筈はない」と言って堂々と官職を去ったそうです。今まさにＮＨＫで大河ドラマ「晴天を衝け」の放送が始まりました。資料に基づくこれまでに知り得なかった渋沢栄一をめぐるリアルなドラマを楽しみにしています。一万円札の肖像画にも選ばれ、より親しみ易くなると期待しています。

渋沢栄一って、やっぱり凄い人！

「日本資本主義の父」「近代日本経済の父」と称される渋沢栄一。▶裕福な農家に生まれた渋沢は、一橋慶喜（のちの徳川十五代将軍）の家臣となり、幕府からパリ万国博覧会を視察するよう指示を受けます。▶フランスに渡航した渋沢は、「欧米諸国の強さの秘訣は商工業の発達にある」ことを発見します。そして「日本に商工業を発展させなければならない」と決心した渋沢は、江戸幕府の崩壊後実業家となり、日本初の銀行兼商社「商法会所」を作ります。▶日本で最初の会社組織を作った渋沢の腕を見込んだ政府は、渋沢を大蔵省に招待し、入省した渋沢は持ち前の事務能力の高さと体力を活かして、租税制度の改正、貨幣制度改革、立会略則（会社の起業規則）の制定など、多くの仕事に携わります。▶しかし大久保利通との対立や、薩長出身者重視の体制への反発から、大蔵省を辞め再び実業界で生きる決心をします。▶渋沢は現在の「みずほ銀行」の設立を皮切りに、現在の「東京海上火災」「東京電力」「帝国ホテル」など500社の企業の設立に関わった他、現在の「日本商工会議所」「東京証券取引所」「一橋大学・早稲田大学」などの諸大学、「日本赤十字社」などの機関の設立にも携わり、日本の資本主義や社会的基盤を作り上げていきました。

渋沢が唱え続けた「道徳経済合一説」

経済活動において、公益の追求を尊重する「道徳」と、生産殖利である「経済」、すなわち仁義道徳と生産殖利とは元来ともに進むべきもの、ともに重視すべきものであり、どちらかが欠けてはいけないという考え方です。それは事業をする上で、常に社会貢献や多くの人の幸せの実現といった公益を追求しながら、同時に利益を上げていくという理念です。渋沢が著書『論語と算盤』を出版し「道徳経済合一説」を唱えたのは1916年、シェルドンが「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という標語の原型になる言葉をシカゴ大会で掲げたのが1910年であり、時期に大差がない事から、渋沢はいかに時代を先駆けしていたかが分かります。渋沢はその他にも、カリフォルニアでの日本人労働者の法的地位に関する日米関係の改善に取り組んだことが評価され、２度もノーベル平和賞候補にノミネートされました。（五大奉仕もやっている(´Д`)　やっぱり凄い!）

今回の職業奉仕セミナーで、大迫三郎PGは『「職業奉仕」とロータリーの魅力』と題して、職業奉仕について幅広く大変貴重なお話をされました。その中で今話題の渋沢栄一について触れられましたので、ここでは「渋沢栄一と職業奉仕」についてフォーカスして、渋沢栄一の半生や史実とともに記事にまとめさせて頂きました。（月信委員会）